

海苔添へて届く手紙や初便り
鼓草たんぼくや行先殖る野の小道
名にめて、蝶もあやかれ福寿草
とりわけて窓の明るし今朝の春
初老の春を迎ひて
我としもひとつましてや春寒し

明治二十年 秀琳書印

丁亥春

萩露
露耕
よし井
菊露
蓮阿

稻つまのまきれてしまふ宵の月
ぬるての染る堤あかるき
相撲とりもよけて遣りこす葬もとり
た、む暖簾のれんに野分さからふ
上かたの噂もやみし状便り
配たあとへのこる茶はつほ
か、さずに早苗見廻る朝のうち
われる日てりに行々子なく
浜の砂石の鳥居に吹たまり
おもしろつくて銭を降せる
五三日よそ余所におくれし花の陰
ふさけは次も広き炉のうへ

58 新年摺

畑打どや何所どこてもみゆる辻榎えのき
鹽たらいの水のあたゝかな昼

青圃
溪齋

雉子一羽いちりゅうたはこのむまにこしらへて

上野
箒目ほうきめの馳走ちそうも見へて花ふゝき
しら箸に青みのうつる木の芽哉

煤山
梅溪

いつも鑑かたみをあてる潜り戸

嵯峨町眺望

水祝ふ新らし舟や残る花

溪齋

寒そらに海から上る月を待
しつまりきつて氷る芦の穂

人ちらぬ湯立のあとや春の月

青圃

薄垣に人目さへきる外後架

亥の春

弘美書印

肩を基手に浦の商あきひ

嘲あざわらをうけた氣随を立通し

一くへたけとぬるき菖蒲湯
はりたての窓にかんく雨の音

59 仙鳥翁古稀賀摺

厩橋うまやばしたちの駄荷かはや来る
内方の客もすまして寺まいり
氣味あひにふく路次口の風
唐丸たからに干鰯ほしかの虫を拾はせる
繻伴じゆばんあらひに舟へ飛こむ

梅うれし雪の白さに咲かはる
含みさへあればめてたし福寿草
烏帽子えぼし着たちから業なり小松曳
蓬萊ほうらいのものにさはらぬ匂ひかな
春風の色かとおもふみとり哉

西京 芹舎
稲處
稲雄
桂花
東京 桂花
三支雄

はしめから胡坐あぐらもゆるす月と花
やよひのうちは徒かちの日もなし

二尊院法会の後も冴かへり

齋圃

手拭てぬぐいをりてのせる月額さかやき

降積る雪や世の花としのはな
幾千代も経て新らしや年の花
まつ明てこゝろのとけし初日影

川又 葉月
二本松 眠霍

数かずをよむ鱸うしお土間に上るなり

七重八重老の曠あま着まてや小松曳

青山

申刻まじくかなれはかへる針弟子

うくひすの枝ふまへたるちから哉

榎寮

常不断とほる次郎も待こゝろ
買くすりから食にとりつく

瓦全